平家物語

七

元曜文庫

平家物語巻第七目録

如國ニ事かゝり乃事

竹生嶋まふとゝ事

火うち合戦の事

木曽乃新状のこと

供利かゝれとゝ乃事

篠原かけせん事

實盛事

孝亡事

木曽山門てゝ状の事

遊てゝ乃事
平家は人志よれ彩書れるす
主上都ぬちのゝす
維盛の都ぬちの事
平主昨幸の事
忠度都ぬちれるす
經正乃都ぬちのゝす
青山のさゝれ事
一門こゝやこゝぬちの事
福原ぬちのゝす

平家物語巻第七

北國ゆきかゝの事

壽永二年三月上志ゆんは木曽乃くりんしや
かし仲兵衛のもとを於朝ゆくにいれるをと
さまゝえかりちゝかりとよゝ海ゝらのさゝれの
兵衛乃もとけよりもとゝ木曽はいゝぬられる
よりてゝ乃のせい十萬よきてゝ信濃乃國へ
ちりかりもと木曽ハ乃れゝ依田の城にはて
ゆるゝ乃のせいこゝよきてゝ城を伴ゝぬく
信濃と越後のさゝいなりふくまゝの山は

大臣殿をはしめとしまいらせて一門の人々
いけとりにせられ給ひしかはおほしきこえ五月
八日の日平家は加賀の国篠原につきにける
大せいをそろへて二手にわけ大手の大将
軍には小松の三位の中将これもりゑち
せんの三位みちもりさふらひ大将には
越中の前司もりとしをはしめとして
そうしてそのせい七万よきかゝと越中の
さかひなるとなみ山へそむかはれける
からめての大将軍にはさつまのかみたゝ
のり皇后宮の亮つねまさあはちのかみ
きよふさ三河のかみとものりを大将
にはむねとのつはもの三千余騎能登の国をさして
むかはれけるそのせい三万よきとそ越中の
さかひなるしほの山へそむかはれけるきそは
ゑちこの国府にありけるかこれをきゝ
そのせい五万よきにてはせむかふ
山へせむかふわかいくさの吉例なれは
とて五万よきを七手にわけまつおち
の十郎蔵人行家一万よきにてしほの山へ
ろ

むかしいかなる樋口の次郎ゆかりあい
のあるかねゆきせんとくまてこれ小ら殿さ
かへさしけるかりと仁科高梨山田の次郎
せんとよれ見なくら殿ちかへ清かりしかり
一萬よりきいとなるに山のすそ杠長の柳原
らと乃木林に引かくすしに井の世郎かね
引し六子よりさまりしのせ殿らわかり田乃
宮にゆしに陣をとらふ木曽わか男一家
よりきこゝかをやへれまりかをしこゝかと山の
小乃まつ也羽丹生に陣をそ屋らりかり

木曽乃殿書

木曽殿のあまりいかりふは平家は大せいこゝ
あんなりはいくさにはさめくら者あいのて
さふこゝかそあらんとしんかりあいの軍と
いふはせい乃あふよりの事なりはあな
せいかさいかりくとわこめく稽くはかふ
あらしとまりはかわしと小志しさて三十
なりはしらおくそくら殿さかの人よりて立
あらは平家あるをみてこゝかあり也源氏の
先陣のむかふあらは何千萬こさかあらむ

人見しよハ為ゆかさわりくさかわ如か
こと谷見しけを平家のせい七萬よりさしる
そうめしわけかふん泉血をなし志かい
おかゆなせわ所也ハ其の苔乃なりよハ矢
のあれ刀のこまのこわるい海よりをとろ
うもと海りふ平家のうてのさふらい大将
かけさの大夫判官しくはふ家もこの苔の
判官ゆるる河内判官ゆるもこの苔の
そこようつもれるゆそうせよりの又海中れ
国の住人せのおの大郎ゆるやもとハ使ゆふ

兵まるあわけ也ともうん屋はふかん加賀の
国の住人ゆうこけ乃次郎かわもとゆるよ
かけくいまとわよこそせられ平家
の長吏貢明いさしもとくいれ如来る木曽
殿ゆのなりしハあまわよふくれよまつさ也
とゆること勢らふ大将軍ちもわらる也
とわけふしるかけの国へ門出わけく七萬よ
さうゆしわまけふ二ふよれそれ也れ
ゆるしさ十二日奥のゆるゆるうちとゆ
木曽殿へ誘歸二ゆさしてゆふ一ゆふハ

朝夕ゆうちなくしこ惜くに祈ん仏申
おめさきかふ事おいぬりし又遠國近
國をうくのおとし六月一日の日祭を神祇
の指大輔大中臣のちかさしを殿上の下口へ
めらせてゐる度兵革をつまらハ伊勢太
神宮へ行幸あるへきよしおなせくさう
太神宮ハむしゐ海乃たらしを天くる
らせゐまいく垂仁天皇の御宇廿又年
三月大和乃國笠ぬいの里より伊勢の國
まうへのこなわ五十鈴乃河上下津岩根に

大宮柱を廣敷てあかめそめをつし
まわこのうて日本六十餘州三千七百五十
餘社乃大小の神祇をやうゐぬうの中にハ無
双なわ所也とも代々の見ん所ゐまつれん
かうハなかわしになる乃見かれの御時右
大臣不比等のまうこさんとき武智郷宮合の
子右近衛乃小將兼大、宰の小貳あら原の
刻ろつさといふへおかなり天平十又年十
月に肥前乃國松浦のこなりぬしく数萬の
軍兵をかりしこの國家をもてしにあ也物

人なり唐人の雲脇といふ名故まことにいふ
雲脇といふ人にて名をいふことあり
いかさま後まもしの人帰朝の様なんに逢人
さ人なりとしたりしかれ者なりとも同しよ
十九年六月十八日しやまかうへり雲脇と
いふ路をかいて無禄寺乃庭にたしへなるハ
二三百人ハかりかしこしこしこしとまと
姫をとしかり法さうしかれ寺ゑにはくく
なりなの弟子ともあまをとりいふ法かふつよ
なの国にたさめこれ須墓と名をしてしに

あり此まことにいくて記入法をかくまいを
あかめられて肥前の国松浦乃して此境の
家とかうまと此の乃里帝の御時平城の
せんこいなりしのうとすくぬとうりてまと
てに世故こそらんとせさ勢なりしかれ
帝御いのわ乃ゑぬに弟三の里女祐智
内親王を奴茂の兵院にしてまいらせ
せしまふ此まとり兵院のくしぬなり朱雀
院乃御時もすこしとしたいしの此いと
ゑ八幡にてつらんしの法神まありして家也

ろ乃也いろうへしさ海くの御いのりとも
ありけり

木曽山門牒状

ちなみにとよ木曽よし仲ハ越前乃国府に
ほいらゆ家乃子らうとうめしあり此て評
定とそこもしくよし仲あふこ乃国をへく
こそ都へハのかゝるへきよ也いの山僧とものの
如せくおとゝもやるんとしんうを屋毎り
てはゆるんとすハ屋すらしかとも当時ハ平
家こそ仏法とも いとす寺をなへ法し

僧をうしなひ悪行をいつくすなり其を
しゆこの為めに上洛せんするよし仲か
平家とむとりなり也いとこゝ山門乃宿徒に
むかりゆゑ合戦せん来もこゝしもたかハ悪
二のまいなりなへしおもしそさすか屋と
大来よいりせんとの如人ハ書よりも
雖也とりなりなり大夫皆かくめいとく見
物るかりなりハ山門の大宿ハこゝ人ハなり
かかなりと一味とうしんなりなりすハはも
とあるいハ平家に同心せんと申と

平家をかたはさんとすゝ仲去年の
秋しゆくいをとらせんかゝぬめよとて我
わかりくん我さらにこゝ信別を出し回ろう
この国れちうへ城の西面長もち数万乃
軍兵我かりしこゝにうせしむふる当
国横田かりしゆして合戦をとり仲まつかふ
こふらさをとらせんかゝのもとまんの兵をや
ゆりをりんぬ風史をうさまとよんこゝ平
氏の大将十萬乃軍士をそつして加陸よ
ちりかうとて敵別かへ列となし黒坂志ゝ

さう志のりしいまの城郭にして数ケ度合戦
をしたりしをいまりくれ中まめくしこゝか清
来を志せるのとしにえたり物なようてそ
必をゆくしせしむは必をくるれ秋乃風の
ゑせ我く屋ゐるよことなるとて冬乃志をれ
かんゆうをかうをしにあひ物し是ひゆへよ
神明仏陀のうすをなりたるより仲か我
アゆくにあらせて平氏をいかるのうへいさん
らくをくいらりふなりし、敷岳の姫をとを
すまてる後陽のちまくよ入無しこ乃時より

山門返てこゝ乃事

山門の大宿この状を記りんしこゝあんれこと
くあるゆゑは平家に同じせんといふ也と
とありあるゆゑは源氏に法りんといふ大宿を
ありあるとゆゑ後にいさまちくなり
共僧ともの其人こゝ前の事は我らを同じ金
輪せいこと天長地久といのりをする中にも平
家は蒙代のあくはいさしに山門におゐてこと
にこゝ敬をいたす忠りにこゝへも悪行法に
すこゝ前人あるをうしさ事くへるを

法りすこゝへともくへ同じゐいかくのゝゆゑにか
ろなさゝ源氏は近年よりまのかゝ度このいく
さふうちゆくうんゆいとてに記雅久に寸
何ろ当山ひとりしゆくうんつさゆゑ平家に
同じしゐうんゆいこゝろふ源氏をうしかん
やまへかくく平氏ちりのこさを記りみしゐ
源氏合力のむ○にちりまへおよし三子一同に
其こゝて返てこゝろをうけ其曽敵又
家のゝらうこゝめしあ同めゝゐ覚明に此返
てうをむらかせらふ

六月十日乃日のてゝ状同十六日ゝゐゝ雖い
ゑ志りのところに数日乃うつわん一時より自
こんとをよそ平家の悪さゆゑ深い年にを
よんゝゐてゝ延のちゝとゝ屋じゆゑとゝなし
来人口におわいさりけるにおさいすゑいく
にいたりゝゐは帝都東北の仁祠にして国家
せいゑりの乃せいさ後いたとせ志りゆゑとゝ
一天久かの天道にをうさゆゑ四海にこし
なんに平のおんせんをえとゝんこりの乃なり
つんかさうおとしゐゝ乃神い志りくす

ゝうかしてにまた家ゝまく累代我国の家に
しまれるさいりにに当時精選の仁ゝ
おゝうしゆきなりをめうしゝゐ義兵をおこし
第一死の命故忘れる一せんのおうをゝつゝの
労いまゝ数年をすゝおさうふにゝ名をて
に四海になりゝ家山乃府流ゝつゝゐゐ
せゝ志りと国家のゝゐめに累家のゝゐめ我
切をうんし我つゆゝをうんとかく乃とく
なゝに山上のせい祈しかしかゝさうおとを
よろこひ海内乃志これこゝわなさと我

しん如自寺他寺常住の仏法并社末社
さいてんの神明あまくたる教法のさうん
事をしらむ崇敬のゆくゑふさしてゆく
せんことをなけいありしのゆゑんなりしかるに
中すめくらんとうちをさしよ志るれハ十まうハ
ち宜よハ十二神将をなくし医王善
逝の使者をしうめ山法院ハいうたう者士よ
あいらそう耶よハ又三子の本流志つらく
しゆ学さんしのさん前を屋めくし悪つよ
治まりの官軍をたすけしめん止観十宗
の方ん風ハとんつよとく和朝の形よとゝめん狂ハ
とこりの法西をおけ俗を豪年のゆりしよ
かたん本流の世んこゝめ乃しく法ゝくきを
きりせよ寿永二年七月二日の日大方らとて
書かれたりける

平家山門へれんしよの事

平家おもひけるハ興福園
城両寺ハうつふんをふくめるおりふしなれハ
かたらふともなひかし当家ハ山門をうらみす
おむくいをさいをむすはす山門又当家の

ゑめに不忠をそんせすせんすりとしろ山王
大師よりさせいかしこゐ三子乃宿徒をかくら
ようやうゐ一門乃公卿十人同心もしん志よの
彩書をうきてく山門へをくらせ其彩書に云
敬白延暦寺をうしゐ氏寺に志あんし
ひとりの屋しろをもて氏社にして一向
天台乃仏法をあふかゝ思ふ事
右當家一族のともかゝあとよこさせいすりあと
ありしいしゐいんとなきに叡山にこれ桓武天
皇の御門宮傳教大師入唐帰朝の後魚頻の

かゝ法をこのところに到ろめ座敷の大戒を
うろうちに法たへゐよりこゐうちに佛
法をんしゐうの也いくりしゐ久くちんこ國
家の道場にそなふ内さにいま保豆乃至れ
流人源のよりとも男のとう後物とうへりしゐ朝
りんをあさうまゐ志かれしなりとかんほうに
くらしゐ同心をいたす源氏らよりなり行家
いまゐうをむさんゐうすまつまんをいえんきい
す國後椋鉢し土宜土貢萬物を押領とを
ようつゐあるいに累代くんしのあとをおい

おほりなりしも東西満山十二所醫王善
逝日光月光無二の丹誠を照してゆい一玄應
をたれ給へしからハ邪謀逆
臣の賊手を君門につかね暴逆
ざんがい乃ともがらかうべをけいどにさらさんよつ
て一もんの公卿ら異口同音に禮をなし
きせい件のことし じゆ三位行兼ゑちぜんの守
平乃朝臣みちもり 正三位行兼右近衛乃
中将平朝臣これもり 正三位行右近衛中
将兼いよのかミ平の朝臣すけもり 正三位行
右近衛の権乃中将兼播磨乃守平乃朝臣し
げひら 正三位行右衛門のかミ兼近江遠江
守平の朝臣清宗 さんミ正三位皇太后宮
の権乃大夫兼しゆりの大夫かゞ越中乃かミ平
乃朝臣経盛 從二位行中納言兼征夷大将
軍兼左兵衛のかミ平の朝臣とももり 從
二位行権中納言兼肥前乃かミ平の朝臣のり
もり 正二位行権大納言兼陸奥出羽按察
使平の朝臣よりもり 從一位前の内大臣平の
朝臣むねもり 寿永二年七月五日乃日敬白